

## 話しにくさの自覚に関するアンケート調査\*

○北村達也 (甲南大)

## 1 はじめに

コミュニケーション障害を持つ人は人口のおよそ5%程度存在すると言われている[1]。しかし、医学的には健常の範囲内に含まれる人々の中にもコミュニケーションに何らかの不自由を感じている人が存在すると推測される。

立川[2]は151名を対象にして話しにくさの自覚に関するアンケート調査を行い、日常的に話しにくさを自覚する人が13名、どちらかといえれば自覚する人が63名存在したと報告した。発話も運動の一種であるから、手先が不器用な人がいるように、発話運動の不得意な人が存在することに不思議はない。しかし、立川の報告はこの問題の潜在的対象者数の大きさを示唆している。本研究ではより大きい規模でアンケート調査を行い、話しにくさの研究のための基礎データを提供する。

## 2 方法

## 2.1 対象者

甲南大学の学部生505名である。年齢は平均19.0歳で、標準偏差は1.1歳であった。対象者のうちいわゆる文系学部(経済, 経営, 文学, 法学)に所属する学生は246名で、理系学部(知能情報, 理工)に所属する学生は259名であった。

## 2.2 質問項目

本研究では4つの質問を行った。第1の質問は、学部と年齢に関するものである。氏名、性別は問わなかった。

第2の質問は、「日頃「話しにくさ」(発話運動が上手くいかない感じ)を感じていますか?」というもので、1. 感じない, 2. まれに感じる, 3. ときどき感じる, 4. 頻繁に感じる, の4つの選択肢から1つを選ばせた。なお、緊張によって上手く話せなくなることは本調査の対象から外れる旨を注意する一文を記載した。

以降の質問は、第2の質問で2(まれに感じる)以上を選択した者を対象にして行った。第3の質問は、「聞き間違えられたり、聞き直されたりす

ることが人より多いと思いますか?」で、回答は1. 思う, 2. 思わない, の二者択一とした。第4の質問は、「どのような場面や発話内容で話しにくさを感じますか。また、「話しにくさ」はどのような感覚でしょうか。」というもので、自由記述式で回答させた。「早口で話さなければならない場面で舌がもつれたり、どもったりしてしまう。」などの回答例も示した。

## 2.3 手続き

調査は講義の時間を利用して教室にて行った。自由意思によって協力してもらう旨を説明した上で、上記の質問を印刷したアンケート用紙を配布した。記入後は回答者が特定できないよう回収した。

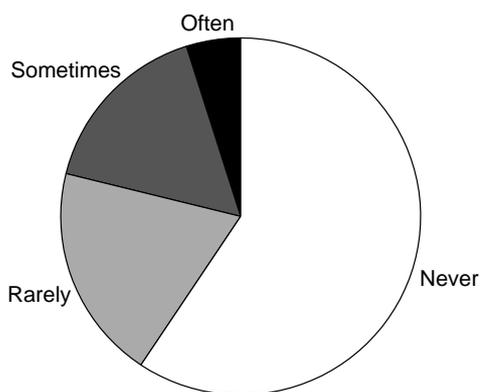
## 3 結果と考察

質問2(話しにくさを感じているか)に対する文系学生と理系学生の回答を図1に示す。この結果から、文系で41%、理系で52%の学生ある程度以上話しにくさを感じていることがわかった。文系学生では「頻繁に感じる」が5%、「ときどき感じる」が16%、「まれに感じる」が20%であり、理系学生では「頻繁に感じる」が10%、「ときどき感じる」が21%、「まれに感じる」が21%であった。

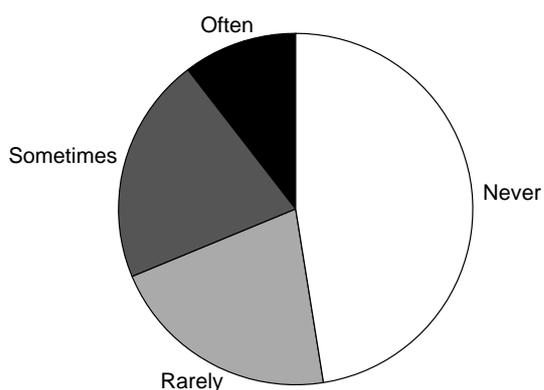
話しにくさを自覚している人の比率は、文系では立川[2]の結果とほぼ同じ41%であった。一方、理系では半数以上(52%)が話しにくさを自覚しており、文系よりも多くの学生が話しにくさを感じているという結果になった。この結果が生得的な原因に由来するのか、後天的な原因に由来するのかは今後検討の必要がある。

質問3(聞き間違えられたり、聞き返されることが多いと思うか)に対する回答を図2に示す。質問2で「感じない」と回答したにもかかわらずこの質問に回答している者は除外した。質問2と質問3の回答の間には高い正の相関があり(文系学生で $R^2 = 1.00$ , 理系学生で $R^2 = 0.87$ )、話しにくさと明瞭度との関連が示唆されている。この2つの事象の因果関係を特定するのは難しい。

\* Questionnaire research of consciousness for physical awkwardness of articulation. by KITAMURA, Tatsuya (Konan University)



(a) Humanities courses



(b) Science courses

Fig. 1 Answers of students of (a) humanities courses and (b) science courses for question 2.

話しにくさの結果として聞き返されることが多くなったケースも考えられれば、聞き返されたため話しにくさを自覚するようになったケースも考えられるからである。また、質問3に対して「思う」と回答した人の割合は文系学生より理系学生の方が高く、ここにも文系、理系の違いが現れている。

質問4(話しにくさを感じる場面や感覚)に対する回答では、早口で話す場合にうまく話せないという記述が多かった。発話しにくい音節を具体的に挙げた回答や、滑舌が悪いという回答も多く、自己の発話に対して分析的な様子が見えた。「噛む」という表現を用いて発話の非流暢性を表現した回答も多かった。近年この表現がメディアを通じて広まった結果、「噛む」ことに対して意識的になっている可能性がある。

この他、緊張すると話しにくくなるという回答も多数見られた。上述のように、本調査では緊張によって上手く話せなくなることは対象外であるが、その点が回答者に伝わらなかったのか、

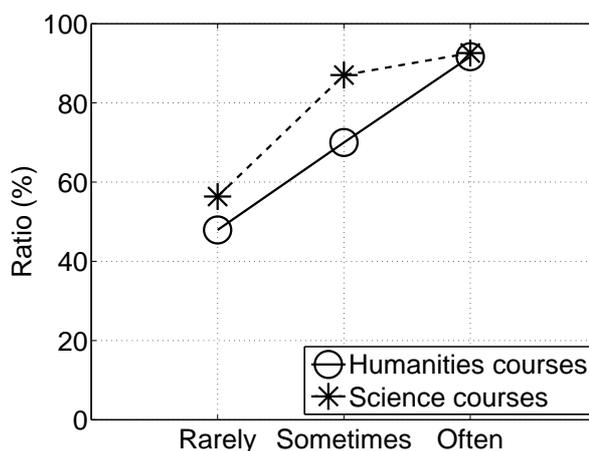


Fig. 2 Ratio of questionee who answered “yes” for question 3.

特に緊張すると話しにくくなるという意味での回答なのかは判断がつかなかった。

話しにくさの感覚については、舌が絡まるような感覚、もつれるような感覚という回答が多数であった。

#### 4 おわりに

約500名の大学生を対象に話しにくさの自覚に関するアンケート調査を行い、(1)文系学生で41%、理系学生で52%が話しにくさを感じていること、(2)話しにくさを自覚する程度が大きい人ほど聞き間違えられたり聞き直されたりすることが他人より多いと感じていることを報告した。本研究ではアンケートの回収率を高くするためにその配布と回収を講義中に行ったが、より匿名性の高い調査を行う必要がある。また、大学生以外の世代を対象にした調査も必要である。

**謝辞** 本研究の一部は平成24年度科研費(25280066)の支援により行われた。ご助言いただいた立川渉氏(現 広島市立リハビリテーション病院)、調査に協力していただいた吉留裕樹君(甲南大学知能情報学部)に感謝する。

#### 参考文献

- [1] 刈安, 城本, 改訂 音声障害, 建帛社 (2012).
- [2] 立川, 話しにくさを自覚する健常者の構音動態の解析: 歯茎音について, 県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科卒業研究論文集 (2013).